

MEETING REPORT

The 11th Annual Meeting on Oncogenes に参加して

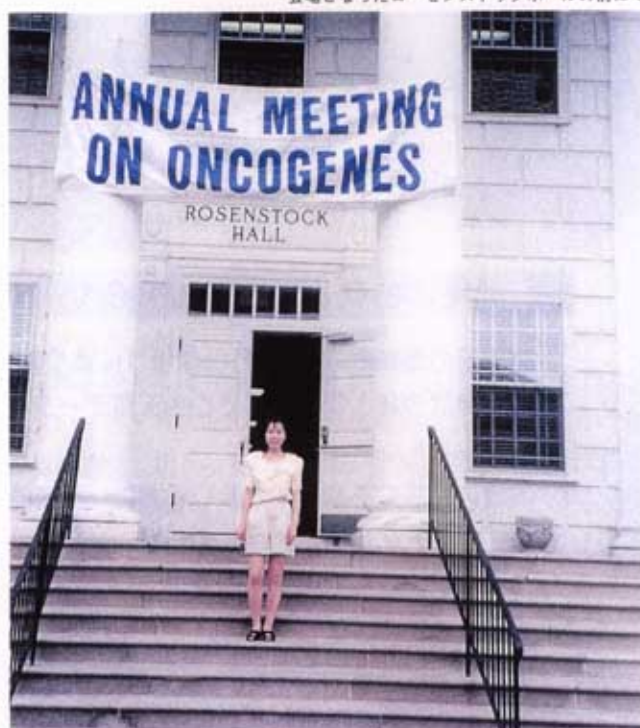
細胞遺伝学研究部
後藤 典子

1995年6月20～24日、アメリカ、メリーランド州フレデリック市で開かれた第11回 Oncogene Meeting に参加しました。その名が示すように、“癌遺伝子”研究に携わる科学者が、世界中から最新のデータをもって集まってくる、非常にエキサイティングな会議です。毎年、フレデリック市内にある女子大 Hood College の、夏休みであいたスペースを借りて（宿泊も大学内の寮）、開催されます。

今年のセッションは、receptor and non-receptor tyrosine kinases, Raf/MAPK, kinase substrates, adaptors and friends, effectors and cytoskeleton, nucleus, cell cycle に分かれていました。チロシンキナーゼ—Ras—MAPK pathway—核内での遺伝子発現という、シグナル伝達のひとつの大きな流れが描かれてから数年経ちました。これらの、ポイントとなるシグナル伝達分子の間を埋めるもの、これらを正あるいは負に調節するもの、分岐した経路上にあるもの、あるいは別経路上にあるもの等、最新の科学的知見が集積していて、これまで細胞内に点として描かれていた様々な oncogene が、どんどん線でつながれていくのが実感され、非常にエキサイティングです。

私は、EGF や IL-3 のシグナル上で、Shc アダプター分子が重要な役割を果たしていて、それは、Ras の活性化だけでなく、Ras とは別経路の活性化をも引き起こすということを報告しました。討論の内容は、日本で仕事をしても、なかなか知ることができない、論

会場となったローゼンストックホールの前にて



文になる前の様々な最新データの話ができるので、非常に収穫が大きいものでした。

会議は、朝8時から始まり、夜11時近くに最後の発表が終わるまで、食事と夕方の休憩を除くと、ほとんど缶詰め状態で、非常にハードです。季節が夏であること、また時差ボケも手伝って、体力的にはやや消耗しましたが、頭の中は、活力に満ちて帰ってきました。

今回は、好運にも、医科研国際交流基金の援助を受けて、会議に参加することができました。本当にありがとうございました。

編
集
後
記

暑かった夏もようやく終わり、虫の声と共に学会のシーズンも始まりです。皆様いかがお過ごしでしょうか。今回は、渡邊編集長の出張をうけて、代理で編集長をさせていただきました。行き届かぬ性格故に、色々しい加減なところがあり、ご迷惑をお掛けしました。発行が遅れたのもそのせい

です。編集長の大変さがよく解りました。さて、イベントにも取り上げたように医科研でも遺伝子治療に対する取り組みが始まりました。スタッフの方々の苦労は大変だと思います。息の長い取り組みで大きな成果の上がることを期待しています。

◎